

# 破れ鍋に綴じ蓋

——辞書で学ぶ英独仏西語のあれこれ——

柳谷 保

## I. 本論の目的と射程

本学の外国語科目は、英語以外に、初修外国語として、中国語、ハンガルのアジア系言語と、ドイツ語、フランス語、スペイン語を開設している。これらの外国語科目の教授陣には、すべての科目にネイティブ・スピーカーが配され、単位数の制約もあるので、全体としては、受講者のコミュニケーション能力の向上に、教育と学習の目標が置かれている。筆者はドイツ語の教員であり、現在の中学校と高等学校での英語教育については、現状を審らかきしないが、自分の授業の受講者に対しては、彼らが英文法の一定量の知識を備えた者であるとして、ドイツ語の授業を行なっている。筆者の場合、外国語の学習には、この一定量の知識、つまり「基礎知識」が不可欠であると考え。この「基礎知識」を増やしていくのが「学習課程」である、と考える。この課程を支える両輪が、英語も含めた一般論として、会話と思考である。会話の核心は、「聴き取り」であろう。思考の前提としては、「表の暗記」が求められる。単位数が限られた初修外国語の現状をいえば、標準的な学生が、独和辞典の例文を参照して、学習を深める状況は考えにくいだが、理想をいえば、そうあってほしい。ただ、それには、6 単位以上の学習を可能にする制度上の配慮が必要であろう。

ところで、先に述べた「基礎知識」だが、一つの言語の学習課程において、その言語に関する無数の「基礎知識」が、既知領域の版図拡張、すなわち未知なる領域への開拓のための前提であることはいうまでもないことであるが、この「基礎知識」はまた、他言語の学習と理解にも、大きく寄与するのではあるまいか。英語のそれが、初修外国語の学習課程に、そして、初修外国語のそれが、英語の再理解と、ひいては日本語の再発見に寄与するのではあるまいか。筆者は、この連鎖・還元現象及びそうした効果を信じて止まない。ただ、その成果については、「聴き取り」面ではまだ即効性が期待できるかもしれないが、「思考」面では、即効性は甚だ疑わしい。なぜなら、それには「関連性」の円環の一応の完結を要するからである。ただ、筆者は、受講者の大半に、そうした「言語観」の萌芽を植えつけることも、また、「外国語科目」の主たる使命と目標の一つであると考え。

副題に「辞書で学ぶ」と書いたが、実は、これがある種、「詐欺的」な行為である。不確かな知識や慣用語、助詞や前置詞の正しい語用、例文、語源(学説)、正書法などを、辞書を参照し辞書を頼りに調べて、何かを述べたとして、それはどこまでが自説といえるのだろうか。それに、辞書には、知らない単語と例文がたくさん載っている。時代の推移と共に、収録語彙も変わる。こうした状況で、「辞書で学ぶ」というのもおこがましいが、「自分の生き方」とほぼ同義として、「辞書で学ぶ」ことの「人間学」的な意義を述べてみたい。畢竟、筆者には「辞書で学ぶ」ことが楽しい、ただそれだけのことかもしれないが、一応、本論の目的を、先に述べた「言語

観」の例示とし、本論の射程を、「好事家」レベルのもの、として論を進める。

## II. 「破れ鍋に綴じ蓋」という表現

「破れ鍋に綴じ蓋」という表現は、構文上、何々に何々という形をとっている。これは、何々の部分を、その言語で正確に発音して、きちんと文字で書くことができれば、まずほぼ完了である。問題は「に」の部分である。まず、動詞を排除して考える。「に」を仮に"to"とすると、日本語と西欧語の間では、語順に差異が生じる。

- |    |                               |              |
|----|-------------------------------|--------------|
| 1) | 花子 に 太郎                       | 花子 にも 太郎     |
|    | 「馬の耳 に 念仏」                    | 「弘法 にも 筆の誤り」 |
| 2) | to every Jill her Jack        | (英語)         |
|    | (zu) jeder Grete ihr Hans     | (ドイツ語)       |
|    | a chaque Marie son Pierre     | (フランス語)      |
|    | A cada puerco su San Mart ín. | (スペイン語)      |

上例で、「ことわざ」として定着しているのは、

「馬の耳に念仏」  
 「弘法にも筆の誤り」  
 「ア・カダ・プエルコ・ス・サンマルティン」(豚にも聖マルティン祭)  
 (マルティン祭、猫も杓子も大浮かれ)  
 (縁日は貴賤高下の堺なく)

の3例である。「に」と「にも」の違いは、"to ~"と"to every / any ~"の違いとした。「花子と太郎」「馬の耳と念仏」「弘法と筆の誤り」「ジルとジャック」「グレーテとハンス」「マリーとピエール」「豚と聖マルティン祭」を同列で扱ったが、基本文型としてはこうなる。

- |    |            |    |                              |
|----|------------|----|------------------------------|
| 1) | 「A」に(も)「B」 | 2) | to (every / any) 「A」 its 「B」 |
|    |            |    | に (も) その                     |

この基本文型に動詞を挿入すると、こうなる。

- |    |                   |                  |
|----|-------------------|------------------|
| 1) | 「花子」に(も)「太郎」がいる。  | 「花子」にも「太郎」が来る。   |
|    | 「花子」も歩けば「太郎」に当たる。 | 「花子」にも「太郎」が見つかる。 |

さて、動詞の部分を英語で表現すると、has / is / is given / finds / comes to などが考えられる。

- |    |   |
|----|---|
| 2) | Hanako has her Taro. (Hanako must have her Taro.) |
|    | Taro is for Hanako.                               |

Taro[<sup>7</sup> s heart] is given to Hanako.

Taro comes to Hanako.

Hanako finds her Taro.

このうち、「ことわざ」では、一般に、“Every ~ finds its ~.”と表現される。

Every Jack finds his Jill. (Every Jack must have his Jill.)

Every Jill finds her Jack.

Every nut finds its bolt.

Jeder Hans findet seine Grete. (ドイツ語)

本論では、「何々」の部分の細部と、動詞の人称変化には立ち入らないものとする。問題が複雑になるからである。つまり、英語でいうところの“every”“any”と“finds”の理解と習得というのは、それだけで、初級外国語としての独仏西語の3言語にとつては、「学習課程」上、それぞれ、前期の大半を費やす程の主要課題なのである。細部に立ち入らないという条件で、話を進めると、「どんなジルにも彼女のジャックは見つかる」という表現の前段階あるいは要約形として、「ジルに(も)ジャック」があるわけだが、これは、第一に、広い世間に「ジルとジャック」はたくさんいるということ、第二に、広い世間の限られた「階層」に「ジルとジャック」が属することを意味する。ジルが「玉の輿」では困るのである。ただ、西欧語の場合、英語を例にとれば、Jackの前にeveryが付いているのが味噌である。さらに、洋の東西を問わず、人間界の話を、動物や道具・什器に託して表現し、しかもそれらが、そのかなり底辺の格付けに甘んじている、というのも味噌である。

Every nut finds its bolt.

犬も歩けば棒に当たる。(Every dog finds its bone.)

豚もそれなりの聖マルティン祭。(Every pig finds its feast.)

“find”は、本来、「行き当たる」という語義をもち、ラテン語の“pons”とギリシャ語の“pontos”に対応し、それらは「渡るもの」すなわち「橋」(pons)と「海」(pontos)を意味した。フランス語は“pont”、スペイン語は“puente”で、共にラテン語“pontem”の進化形態である。言ってみれば、

OE findan(フィンダン) > ModE find

L pontem (対格) > Sp. puente

という進化の図式でとらえることもできる。話が脱線したが、「何々に何々」を、和英で対比させると、以下ようになる。

「花子に太郎」	(Jack and Jill.)
「花子にも太郎」	(Every Jill finds her Jack.)
「弘法にも筆の誤り」	(Even Kobo draws wrong.)
「馬の耳に念仏」	(A horse eats carrots, not the Bible.)

どうやら、日本語の「何々に何々」は絶品といえる。さて、「われ鍋にとじ蓋」だが、これは、「破れ鍋」と「綴じ蓋」のいずれの部分も一筋縄ではいかない。「花子と太郎」と“Jack and Jill”とは、微妙にニュアンスが異なる。「破れ」と「綴じ」に、人生の「苦楽」が塗りこめられていて、そこに深い味わいがある。ただ単に、「どんな壊れた、傷んだ、歪んだ鍋にも、蓋が見つかるものだ」といっているのではない。蓋の方も、それなりに使い古された代物で、あちこち修繕してあるのである。つまり、第一に、「破れ鍋」に「綴じ蓋」だからこそ釣り合いが取れるという意味、第二に、いずれも粗末な日用品だが、生活には欠かせないという、謙遜と自負の念の入り混じった感覚、第三に、破れ鍋に綴じ蓋だから、しまう時は棚の上でいつも一緒だという連帯感を表現している。もちろん、棚とは階層の比喩であり、鍋も蓋も生活の比喩である。ここまでは、どちらかといえば、庶民の生活空間の範囲内なら、必ず、どこかに未来の配偶者がいるものだという、親心の物言いである。あるいは、親が、他人様に、息子夫婦をそう形容して、内心、安堵する場合もあろう。ところが、中年の夫婦が、自分たちを指して、「いえ、破れ鍋に綴じ蓋です」と言う場合、実際にそうだと思いつつ言う場合もあれば、謙遜しての口上の場合もあろうが、それらは、いずれも、夫婦となるまでの経緯をいうよりは、夫婦となつてからの、人生の苦楽を伝えている。もちろん、前提となるのは、「庶民に限られる」ということである。これが、第四の内容である。筆者は、「綴じ蓋」の「綴じ」がすべてを決していると思う。というのも、これは次章で紹介するが、おそらくは、すでに15世紀には成立していたであろう、スペインとフランスの「破れ鍋にも蓋あり」では、蓋の方には、「綴じ」の形容がないからである。日本の場合も、すでに「宮本武蔵」の時代には、この「破れ鍋に綴じ蓋」が成立していたと仮定すると、この蓋の形容の問題は、「何々(4文字)」に「何々(4文字)」という日本語に固有の構文・表現形態の問題と、蓋の「素材」の問題にその理由があると思われる。西欧語の場合、「蓋が見つからないほどに醜い鍋はない」とか、「そこまで醜い鍋はない、蓋は見つかる」といった構文を取り、動詞がふたつ、最初の文は否定文、ふたつめの文も否定文で動詞は接続法、という込み入った表現となり、蓋を形容する余裕はない。次に、蓋の素材は、鍋と同じ金属で、鉄と推測される。これに対し、日本の場合は、芋粥などに使われる、鉄鍋に丸い木の蓋であったと思うのである。以下に、スペイン語の例を紹介する。

No hay olla tan fea que no halle su cobertera.  
 無い 鍋 まで 歪 程 見つけない その蓋を

(ノ・アイ・オリャ・タン・フェア・ケ・ノ・アリエ・ス・コベルテラ)

(There's no pot, however ugly, which wouldn't find its cover.)

(There's not such an ugly pot that wouldn't find its cover.)

(Be it ever so ugly, there's no pot that wouldn't find its lid.)

(No pot so ugly, it finds its lid.)

素材の問題はさておき、「何々」に何」、つまり、「破れ鍋」に「蓋」では、それこそ「釣り合い」が取れない。形容の2文字が必要であったはずである。要するに、「簡潔な表現」「庶民の視点」「階層と生活」「釣り合い感覚」が求められた結果、「破れ鍋に綴じ蓋」ができたと思う。

### III. 西欧の「破れ鍋にも蓋あり」

前章では、A)「どんな何々にも何々」、B)「どんな何々もその何々を見つける」、C)「そうまで～な何々はない、その何々が見つからない程の」という3種類の構文を取り上げた。以下に、「破れ鍋にも蓋あり」の内容で、例文を紹介する。典拠は、Langenscheidtの大辞典(英独、独英、仏独、独仏)とポケット版(西独、独西)、書籍としては、dtvの西独対訳本『スペインのことわざ選』及び同学社『ドイツ・西欧 ことわざ・名句小辞典』であるが、見当たらない場合、筆者が作成した。典拠の名称、発行年等は、末尾の参考文献等を参照していただきたい。『スペインのことわざ選』は、約700のことわざを載せたもので、あと書きによれば、それらは、原則として、人文主義者でサラマンカ大学ギリシャ語教授であった、エルマン・ヌニェス・ピンスィアノ(1553年歿)編纂によるものと、セルバンテス(1547-1616)の『ドン・キホーテ』から、つまりサンチョ・パンサの語る「ことわざ」から選定したものである。前章の「豚もそれなりの聖マルティン祭」(p.78)と「破れ鍋にも蓋あり」(p.21)は、ここからの引用である。以下、英独仏西語の順で列記する。

#### A) 「どんな割れ鍋にも綴じ蓋」

To every nut its bolt. (筆者)

Zu jedem Topf sein Deckel. (筆者)

À chaque pot son couvercle. (同学社 p.99)

A cada olla su cobertera. (筆者)

#### B) 「どんな破れ鍋もその綴じ蓋を見つける」

Every Jack finds his Jill. (同学社 p.99)

Jeder Hans findet seine Grete. (同学社 p.99)

Chaque pot trouve son couvercle. (筆者)

Cada olla halla su cobertera. (筆者)

#### C) 「その綴じ蓋が見つからない程の破れ鍋はない」

There's no pot, however ugly, but finds its lid. (筆者)

Kein Topf [ist] so schief, er findet seinen Deckel. (同学社 p.98)

Il n'est si méchant pot qui ne trouve son couvercle. (Lang. 仏独)

(Auch die Hässlichste findet noch einen Mann.) (p.233)

No hay olla tan fea que no halle su cobertera. (dtv p.21)  
 (So hässlich ist kein Topf, dass er nicht seinen Deckel fände.) (対訳)

西欧語の場合、筆者作成のものは当然除くが、すべて配偶者の問題で、つまり her prospective bridegroom ないし her husband to come のお話で、日本の「お見合い」を連想させる。中年の夫婦の「破れ鍋」と「綴じ蓋」としての「所帯」の感覚は排除されている。ところで、娘を励ます言葉としての「破れ鍋にも蓋あり」あるいは「破れ鍋に綴じ蓋」（どんな破れ鍋にだってどこかに綴じ蓋が転がっているさ）と対照的なものがあつたので、紹介すると、

A la hija mala, dineros y casalla. (dtv p.20)  
 (Hast du eine böse Tochter, gib ihr Geld und verheirate sie.) (対訳)  
 (性質の悪い娘がいたら、持参金を弾んで、さっさと嫁に出せ。)

casalla は、ことわざでなければ、cásala とすべきと思う。他に「娘三人に母親が加わると、それはもう地獄だ」というものもあるが、「破れ鍋に綴じ蓋」が一番おとなしい。「破れ鍋」自体、すでに「人権侵害」だという判断もあるが、「ことわざ」を相手に、喧嘩はできない。

#### IV. スペイン語の語彙分析(筆者の推論も含めて)

筆者は、日本語の「破れ鍋に綴じ蓋」に一番近い「表現」は、スペイン語のものではないかと思うが、仮にフランスの方が古いとしても、両者の差は、「比較表現 que」と「関係代名詞 qui」にのみ求められるにすぎないと思う。日本の方が古いのかどうかも解らない。古いことに意味があるとすれば、それは、一方が他方の成立に影響を与えた場合に限られると思う。ドイツ語の

Kein Topf so schief, er findet seinen Deckel.  
 (No pot so deformed, it finds its lid.)

は、表現と構文が、若干稚拙である。「ことわざ」は、「簡素」な方が新しいはずである。例えば、いずれ、「弘法にも筆」や「馬に念仏」とか「破れ鍋」に縮約されるかもしれない。

#### 《スペイン語に対応するラテン語》

Sp. No hay olla tan fea que no halle su cobertera.  
 L. Non habet ollam tam foedam quam non reperiat suum operculum.

ス	no	hay	olla	tan	fea
ラ	non	habet	ollam	tam	foedam

ス	que	no	halle	su	cobertera
ラ	quam	non	*fallat (reperiat)	suum	*[c]operculum

\*fallat : fallat はラテン語では would deceive の意。この場合の文意は、ほぼ、  
 (There's no pot, however ugly, but deceives its lid.)  
 「鍋心 下心あり 蓋心 騙し騙され 似た者夫婦」(お見合い結婚)  
 「魚心 下心あり 水心 騙し騙され 泡沫の恋」(恋愛結婚)  
 「魚心 したたかなりや 水心 バブル弾けて 泡沫の罪」(談合贈収賄)

\*[c]operculum : ラテン語で「蓋」は operculum で、co- は後の時代の産物。

ラテン語 fallere (偽る、誤らせる、履行しない) > (手許にない、不足する) > (探しに出かける) > (行き当たる) > スペイン語 hallar (見つける) [筆者の推論]

ラテン語 aperire (開く)・operire (閉じる) > ラテン語 operculum (蓋) :  
 ラテン語 co + operire / co + operculum > フランス語 couvrir / couvercle スペイン語  
 cubrir / cobertera > (フランス語から) 英語 cover [これは定説]

英語の cover (動詞・名詞)には、これだけの「歴史」が刻み込まれていることも、ついでに、紹介できた。

(結びに代えて)

筆者の関心は、「破れ鍋」はともかく、「綴じ蓋」の「観念」が、日本にいつ頃定着したのか、ということと、「破れ鍋」と「綴じ蓋」が、それこそ「観念」上の「借老同穴」として、人々の心情において、同時に成立したのか、という2点に絞られる。しかし、答えまでは、なぜか、そう知りたいとは思わない。いわゆる「エポケー」(判断中止)なのだろうか、それとも、これは「聖域」なのだろうか。物事には、問題の所在とその在り様の確認にまでは、関心があっても、その先の答えまでは別に求めない、というような、不条理な側面があっただけで、  
 「人間性」なども、まさしくその一例であろう。「ことわざ」が重宝される所以である。

使用したテキスト

"Refranero español Spanische Sprichwörter" Deutscher Taschenbuch Verlag. dtv  
 zweisprachig. Hrsg. v. Erna Brandenberger. Originalausgabe 1986.

(以下、使用したテキストから、面白いと思うものを、いくつか紹介する。)

El hombre es el fuego, la mujer la estopa, viene el diablo y sopla. (dtv p.21)  
 (Der Mann ist das Feuer, die Frau der Zunder, dann kommt der Teufel und bläst.)  
 (男は炎、女は火口、仕上げは悪魔の火吹き竹。)

Si un ruin se va por la puerta, otro viene que nos consuela. (dtv p.47)  
 (Wenn ein Schuft zur Tür hinausgeht, kommt ein anderer herein, der uns tröstet.)  
 (ワルが一人出て行ったら、同情を装って、新しいのがやって来る。)

Salíme al sol, dije mal, oí peor. (dtv p.47)

(Ich ging hinaus, sagte Böses und hörte Böseres.)

(世間に出て、散々グチをこぼしたが、もっとひどい話を聞かされて帰って来た。)

Si el necio no fuera al mercado, no se vendería lo malo. (dtv p.51)

(Wenn kein Dummkopf auf den Markt ginge, ließe sich die schlechte Ware nicht verkaufen.)

(馬鹿が市場に来なければ、ガラクタも売れまいよ。)

Quien hace lo que quiere, no hace lo que debe. (dtv p.71)

(Wer tut, was er will, tut nicht, was er soll.)

(したいことをする者は、しなければならぬことをしない。)

#### 参考文献

下宮忠男編著：『ドイツ・西欧 ことわざ・名句小辞典』 同学社。1994年。

宮腰賢 編：『現代に生きる 故事ことわざ辞典』 旺文社。1983年。

中島文雄 寺沢芳雄 共編：『英語語源小辞典』 研究社。1970年。

#### 使用した辞書

Muret und Sanders : Langenscheidts enzyklopädisches Großwörterbuch.  
Englisch-Deutsch. 1974.

Muret und Sanders : Langenscheidts enzyklopädisches Großwörterbuch.  
Deutsch-Englisch. 1974.

Edmund Klatt : Langenscheidts Taschenwörterbuch. Englisch-Deutsch. 1970.

Hersg. v. Langenscheidts Redaktion : Langenscheidt Taschenwörterbuch.  
Englisch-Deutsch. 2003.

Wahrig : Das große deutsche Wörterbuch, 1967.

富山芳正(編集主幹) :『独和辞典』 郁文堂。2003年(第二版)。

Karl Sachs und Césaire Villate : Langenscheidts Großwörterbuch.  
Französisch-Deutsch. 1961.

Hermann Willers : Langenscheidts Taschenwörterbuch.  
Spanisch-Deutsch. 1965.

Fr. Veske und T. Noeli : Langenscheidts Taschenwörterbuch.  
Deutsch-Spanisch. 1972. (Neubearbeitung von H. Willers)

Langenscheidt-Redaktion : Langenscheidt Taschenwörterbuch Spanisch. Neubearbeitung.  
Spanisch-Deutsch / Deutsch-Spanisch. 2004.

G. Langenscheidt : Langenscheidts Großwörterbuch. Lateinisch-Deutsch.  
Unter der Berücksichtigung der Etymologie von H. Menge. 1911.

G. Langenscheidt : Langenscheidts Großwörterbuch. Griechisch-Deutsch.  
Unter der Berücksichtigung der Etymologie von H. Menge. 1913.